

# 体罰経験者の体罰容認傾向と 体罰再生産について

渡邊 雅志

本研究では、先行研究で明らかになっている、体罰経験者の方が体罰未経験者に比べて体罰を肯定的に捉えているという事実から、その結果として体罰が再生産されているのではないかという問題意識のもとに研究を進めていった。まず全国大学体育連合が 2013 年に行ったアンケート調査をもとに自ら予備的なアンケート調査を行った。その結果、先行研究と同様に体罰経験者の方が体罰未経験者よりも体罰を容認する傾向を示せた。加えて、体罰経験者でありかつ体罰を容認する人は指導者への信頼が強い傾向を得た。また体罰に関する先行研究の検討から体罰分野における質的な研究の不足が指摘できた。そのため予備的アンケート調査を基に、インタビュー調査を実施した。まず体罰経験者・体罰未経験者の中から、体罰肯定派・否定派の4類型に分類した。そして年齢、競技時期、競技レベルの視点から同学年の男性 4 人を対象者にピックアップし、インタビュー調査を行った。インタビューの内容は録音し、トランスクリプト化し、分析を行った。一方で質的研究の先行研究の分析からは、スポーツ選手の転機の語りには「自己転換の語り」「空白期間の語り」「アンカーとしての出来事の語り」という構造の特徴が存在する事が明らかになった。そこから本研究では以下の仮説を設定した。体罰経験者は体罰経験によりアイデンティティを失った「空白期間の語り」をしながらも、「自己転換の語り」によって体罰を肯定的に捉え、「アンカーとしての出来事の語り」では体罰を肯定化する教訓的な語りが存在するのではないかと考えられる。これを基に、それぞれの語りを個別に分析した。そこから総合考察として比較・検討を行っていった。その結果以下の 3 点が明らかになった。一つ目は体罰経験者の語りには転機の語りが存在する事。二つ目は体罰経験者及び目撃者の語りには、矛盾した語り特徴的に表れている事。そして三つ目に体罰に関する事と自己経験を語る事を別物として語っている事実である。加えてインタビュー調査の結果、アンケート調査だけでは明らかにならない事実が明らかになった。体罰否定派の人が肯定的な語りをする事や、体罰目撃経験が体罰容

認性に影響を及ぼす可能性はアンケート調査では見えてこなかった事実である。インタビュー調査により、アンケート調査では明らかにならない事実が示唆できた。またスポーツ選手の転機の語りの構造を基に、体罰経験者の語りの構造を示す事ができた。さらには体罰経験者の語りの特徴として挙げた矛盾の語りは、どのような語りの構造を持っているのかも個別の例から示せた。転機の語りの構造から、自己経験を肯定化している為に体罰を肯定的に捉えている場合が存在する事が分かった。また矛盾の語りの構造からは、指導者への信頼関係を否定できない為に体罰を肯定的に捉える事が明らかになった。そして自己経験の肯定化と指導者への信頼関係から体罰を肯定的に捉えているために、体罰経験者は体罰を容認する傾向にあり、体罰再生産しているのではないだろうか。